



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本におけるジャンプスキーの発達に関する歴史的研究：黎明期における北大スキー部の活動を中心に
Author(s)	中浦, 皓至
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 89, 153-182
Issue Date	2003-03
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.89.153
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28900
Type	departmental bulletin paper
File Information	89_P153-182.pdf



日本におけるジャンプスキーの 発達に関する歴史的研究

— 黎明期における北大スキー部の活動を中心に —

中 浦 皓 至*

A Historical Study of Ski-Jumping in Japan : Achievements of the Hokkaidou University Ski-Club in the Taisho Era

Koji NAKAURA

【要旨】日本ジャンプスキーの発祥については、わずかに西沢によって北大スキー部が基礎を作ったという簡単な説明がなされている程度で、いままでほとんど研究されていない。山崎は、大正4年2月の札幌・円山で開かれた北大スキー大会において幅2mの溝を跳び越える障害物競走をジャンプの草分けである、と記している。当時「高飛」と呼ばれていたジャンプは、明治44年に小樽の大矢敏範によって始められた。大正3年に大矢が北大に入学、「ジャンプの練習をしなければ真実のSchiläuferになれない」と主張する本原均と協力して組織的に取り組まれることになった。北欧から帰国した遠藤吉郎の技術指導と、「本格的な固定ジャンプ台を作らなければ技術も伸びない」という助言によって三角山に日本初のジャンツェが作られた。北大スキー部員によって競技規定が整備され、ジャンプ大会が開かれるようになって、ジャンプ技術が全国的に普及していった。

【キーワード】ジャンプスキー、北大スキー部、大矢敏範、三角山

はじめに

1911(明治44)年1月、Theodor Edler von Lerch(1881~1945;以下、レルヒ)が高田で教えたスキー技術は、Mathias Zdarsky(1856~1940;以下、ツダルスキー)が創案したLilienfelderスキー技術(当時、一本杖とか奥国軍用スキー術、北海道ではアルペンスキー術ともいわれたが以下、リリエンフェルト)のみであったといわれていた。ところが実際には、当時ノルウェー・スキー技術に含まれていた「空中跳飛法」という空中を飛ぶ種目も伝授されていた。当然、翌45年2月の旭川スキー講習会においてもレルヒは、それも含めたノルウェー技術を指導していた¹⁾。北海道においては、それらの技術が三瓶勝美らを通して、北大生を中心とする札幌や小樽に伝えられたのである。

日本のスキー発展史をみると、レルヒ以後の高田ではもっぱらリリエンフェルト技術が定着したのに対して、札幌では北大生を中心に体育(スポーツ)用スキーとして幅広い技術が追求

* 北海道大学大学院教育学研究科博士課程(健康スポーツ科学講座)

された。つまり、高田では教えられたスキー技術を金科玉条の如く伝えられたのに対し、札幌では導入された技術を応用発展させたところに両者の差異があった。

本論のジャンプ・スキーについても、そのような状況のもとに北大生が外国のスキー文献によって独自に研究し発展させたものである。

日本ジャンプの歴史について、最初に西沢（後の小川）勝次が、

[本邦に於けるスキージャンピングが普遍的に研究され始めたのは]一九二三(大正十二年)二月、小樽市に於て開催された第一回全日本選手権大会〔以下、第1回大会〕であった…(中略)…此〔12年から〕の三年間に於ける発達は真に目覚ましいもので〔あり〕、…(中略)…日本のジャンピングに率先指導の任に当たり、今日の基礎を作られた北大スキー部の諸先輩に深く感謝の意を表する²⁾ (下線筆者)

と述べている。ここで西沢は、北大スキー部の築いた「基礎」が如何なるものであったのかについて、具体的に記述していない。一方、大正4年2月の円山で開かれた北大スキー部主催第2回スキー大会において、幅2mの溝を跳び越える障害物競走が行われたが、山崎は「これがジャンプというものの草分けである」³⁾と記している。それを受けて、赤坂は、『北大スキー部五十年の歩み』に「果たしてジャンプと呼べるかどうか疑問はあるが、とにかくスキーをはいてジャンプした最初の記録である」⁴⁾と叙述している。

ところで、先の西沢が論述した第1回全日本スキー選手権大会以降のジャンプについては、竹節作太⁵⁾もかなり具体的に記述しているが、近年の「日本ジャンプ発達小史」⁶⁾などをみても、西沢説がそのまま引用されている。日本におけるジャンプスキーの発祥を扱った先行研究は、その後もみられない。

そこで本論文の目的は、先ず日本への伝来前の世界ジャンプ発祥史を概観し、日本ジャンプスキーの発祥期における北大生の研究過程を解明することによって、日本ジャンプの発展した経過を明らかにすることである。尚、ここでジャンプスキーの発祥期とは、明治44年のスキー導入から第1回全日本スキー選手権大会が開かれた大正12年頃までの期間とする。

第一章 世界のジャンプ

第一節 ジャンプの原型

先ず世界のジャンプ発祥から概観する。そもそもジャンピングとは、突起した小丘を飛び越えた時の言い知れぬ境地から生まれた、と言われている。例えば、1888年にグリーンランド初横断に成功した Fridtjof Nansen は *The first crossing of Greenland* の中で jumping について、次のような記述とイラスト(図1)を載せて説明している。

The jumping is done on a steep hillside, which has a gradient of perhaps from 30° to 40°. In the middle of the hill a bank of snow is built, or there may be some natural break in the ground or projecting rock which serves the same purpose⁷⁾

野崎によれば、1808年のテレマーク地方で開かれたスキー大会でジャンプのデモンストレー

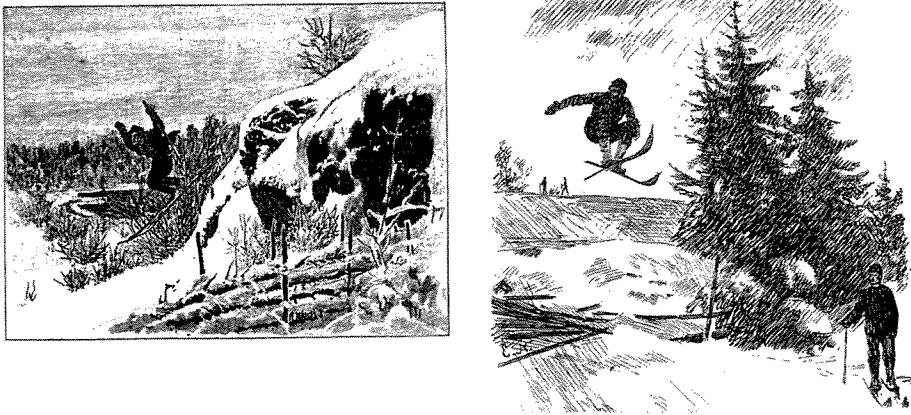


図1 Nansen a jumping

ションが行われたが、1790年頃から次のような先駆けのジャンプがあったという。

斜面をすべって、その途中に雪でバンプをつくりとんだもののようである。ときに小さな牧畜小屋の屋根からとんだりしたものようだ。記述では Trondelag の兵士が十五エル（エルはその昔の単位、一エルは四十五インチ）とんだというのが残っている。この種のジャンプは、滑降途中に自然に飛ぶものと区別されており、意識的にジャンプして踏んでない雪の中に着陸し、とんだ距離を争うという形がとられていた⁸⁾。

北大スキー部々員の廣田戸七郎は、「昔のテレマーク型即ち "Op Traekke" のテクニックは、明かに純スポーツの運動であるジヤムプテクニックの方面と、一般スキーテクニックのスポーツ的影響による所謂ゲレンデの方面とに完全に分化し」⁹⁾と述べて以下、1930年代に「ゲレンデの方面」すなわち "Op Traekke"（又は Traekke hop）からノルウェーのテレマーク地方のスキーによって「ジヤムプテクニックの方面」に分化したと論述している。

第二節 ジャンプ大会

テレマーク地方のスキーが、ジャンプテクニック方面に分化した歴史的な出来事、それは1879年にノルウェーの首都クリスチャニア（現在オスロ）近郊の Huseby Hill（ヒゼビー丘）で開かれた第1回ジャンプ大会であった。（図2）

竹節は、D.M.M. Crichton Somerville（以下、ゾンマービル）の論文によるとして、この大会の様子を次のように紹介している。

出場選手の多くは長くて強い棒の上に馬乗りになって…つまり鞆丸制動で必死になってスピードを殺しながらアプローチを滑り、その



図2 小枝を手に持った少年

まま踏切台から空中に飛び出した。本人はとてつもない距離を飛んだと思っているのだが、実は滑り落ちた程度である⁵⁾

以下、この続きをゾンマービル本人の論文 “The Origin and History of ski” には、次のように記述されている。

But then came the Telemark boys, erect at starting, pliant, confident, without anything but a fir branch in their hands, swooping downwards with ever increasing impetus until with a bound they were in the air, and 76ft. of space was cleared ere, with a resounding smack, their ski touched the slippery slope beneath, and they shot onward to the plain, where suddenly they turned, stopped in a smother of snow dust, and faced the hill they had just descended! ¹⁰⁾

これこそ世界スキー史上における「意義深く画期的なスキー競技会」と評されている大会である。日本では、この論文が多くの著作に引用されている。

第二章 ジャンプ技術の導入

第一節 輸入技術書

では次に、ジャンプスキーの発祥期に日本では、世界の如何なる技術が導入されていたのかを見ていく。当時、日本に輸入されていたスキー技術書として北大スキー部には、次のような書籍が所蔵されていた。

- ① *How to Ski*, V, Caulfield, 1924
- ② *Ski-Running*, E.C. Richardson, 1904
- ③ *Der Schi*, H, Hoek, 1911
- ④ *Schneeschuh und Rennwolf*, M, Schneider, 1900
- ⑤ *Das Ski-laufen*, F, Huitfeldt, 1907

これらはいずれもスキー技術の総合的な技術書であり、ジャンプ技術の専門書ではない。記載されている jumping の技術説明を読むと、書かれた内容はどれもそれほどの差異はない。例えば、V, Caulfield による *How to Ski* は、スキー技術全般をかなり詳細に、しかも要領よく平易に書かれているが、著者が回転技術に秀でているためかジャンプを記述した文（ジャンプの説明文は 35 頁、以下同じ）に力点がおかれていないように見受けられる。次に E, C, Richardson の *Ski-Running* も前書と同様に我が国で多く読まれていたが、jumping については、前書以上に簡単にアウトラインだけしか説明されておらず（10 頁）、技術的にも軽視されているように見える事ができる。H, Hoek の *Der Schi* は、明治 42 年にコラーが取り寄せ、日本で最も早く読まれるようになったスキー書である。後述するように、木原均が主に jumping を理論的に研究した時の技術書でもある。これには jumping について 24 頁にわたって説明され、その中に（図 3）のイラストが掲載されている。

これらの本に共通しているのは、ジャンプの他にスキー技術の全般が初心者向きに解説されていることである。この頃、すでに世界のスキー界では、jumping がゲレンデ種目から分離し独

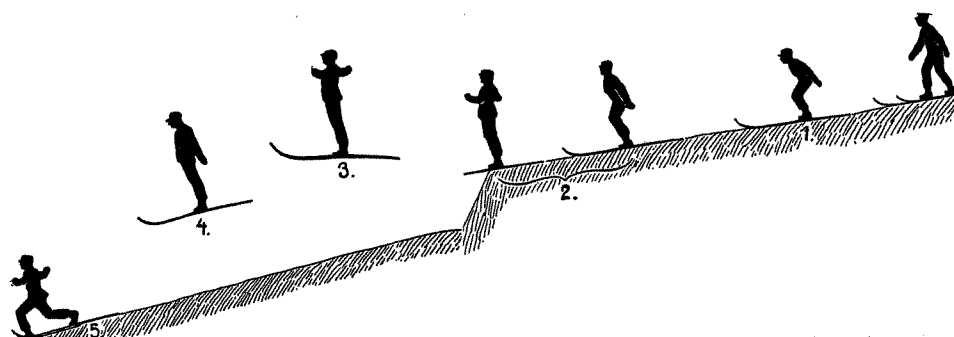


図3 Der Schi の jumping

立した分野として認識されていたと思われるにもかかわらず、他のスキー技術と同列にしか扱われていないのが特徴である。

第二節 日本のスキー文献

では、次に日本でジャンピングが如何に扱われていたのか、年代順に見ていくことにする。

(1) 『スキー術』(明治45年；鶴見宜信)

『スキー術』にはノルウェー式運動の一つに「飛行」を挙げ、次のように紹介されている。

飛行ノ為ニハ第十九図〔図4〕ノ如キ演習場ヲ設備セサルヘカラス斜面ハ跳飛点ノ上部ヨリモ下部ニ於テ急ナルヲ要ス而シテ跳飛点ノ直上三乃至五米間ハ略々水平ナラサルヘカラス跳飛点ノ雪ハ過キ或ハ硬ニ失スヘカラス跳飛点及落達点ハ雪面ヲ踏ミ固メ又跳飛点ニハ標識ヲ立ツヘシ飛行ニハ初学者ハ杖ヲ用イサルヲ要ス¹¹⁾

これが日本で最も古いジャンプ技術を解説した文献であろう。尚、この著作について、臼田が内容を『氷滑術初歩』(明治42年；山本喜市)、丁裁を『スケート術』からとって作成したと述べているが¹²⁾、筆者は内容を比較検討した結果、レルヒの師・ツダルススキーの著した“Alpine Skifahr-Technik”をモデルに、技術内容もその翻訳に近いと見ている¹³⁾。

(2) 『スキー滑走』(大正2年；金井勝三郎)

金井は、鶴見の著作『スキー術』と山口十八著『スキー教育法』(明治44年)に学び、この書を著した。これにもノルウェー式運動として「空中飛行」¹⁴⁾が図解(図5)されている。この部分はDer Schiのjumpingからイラスト(図3)を引用したと見ることができる。

(3) 「スキー及びスキー術に就いて」(大正3年；北大『文武会々報』第73号)

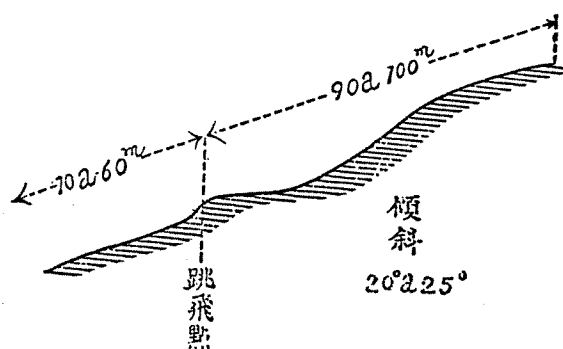


図4 鶴見著『スキー術』の飛行

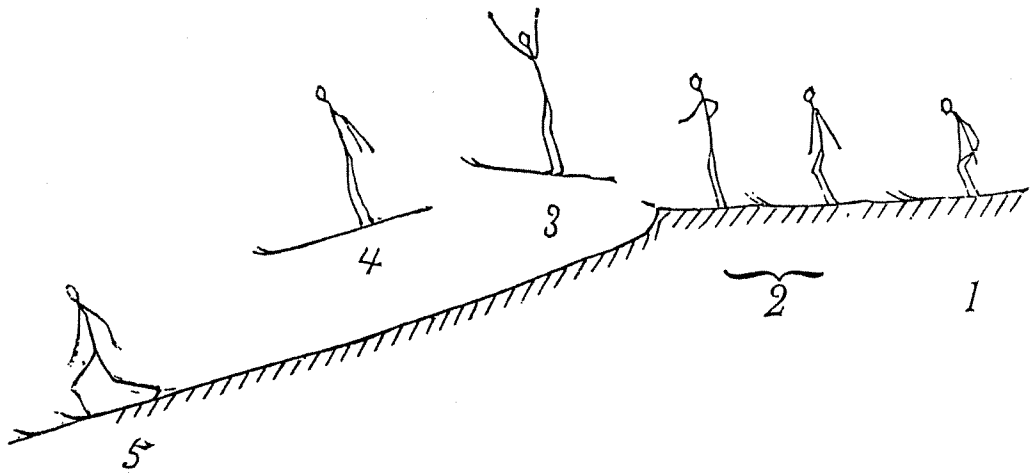


図5 金井著『スキー滑走』の空中飛行

北大スキー部が初めて発表したこの技術論文の中に、飛躍について「スキー術練習に付きての注意」が「スキーの過短、不適當なる結締具、着陸報の不完全、スキーの不平行及び不水平、丘形の不良の柔らかさか又は湿気ある雪」¹⁵⁾と記されている。

これは大正2年シーズンの練習参加者に配布された『スキー術基本動作説明書』（現存していないが、筆者はガリ印刷の簡単なプリントではなかったと推測している）にも書かれていた。北海道では最も古いジャンプ技術に関する文献であると思われる。

(4) 「スキーに就いて」（大正5年；北大『文武会々報』第79号）

北大文武会雑誌に掲載された無署名論文「スキーに就いて」¹⁶⁾に、

今左に示すスキー術の精華たるジャンピングのレコードによりて彼等の進歩の一斑を窺ふに足らん。

一八七九年（諾威最初の競技会）	二十三米
一八九九年	二十三米
一九〇二年	四十二米
一九〇八年	四十六米

などとジャンプの世界レコードが書かれている。

(5) 木原均「スキーに関する資料（其一）」¹⁷⁾（大正6年，北大『文武会々報』第81号）

後述する如く木原は、大正元年に北大予科に入学しコラーからスキーの話を聞かされ、最初に読んだのが *Der Schi* であった。この論文は、入学以来読んでいた *Der Schi* を翻訳したものではあるが、ジャンプに関してまとまった論文として日本における最初のものといえる。

(6) 木原均「スキーに関する資料（其二）」¹⁸⁾（大正6年，北大『文武会々報』第82号）

この論文は、(其一)の続きで世界のジャンプ史も含めて「スキーの歴史」が述べられている。いわば日本で書かれた最初の世界ジャンプ・スキー史であったといえる。

(7) 『スキー術』¹⁹⁾（大正8年；木原均・遠藤吉三郎共著）

木原と遠藤が公刊したが、この中に鶴見や山口と同様にスキー技術の一分野としてジャンプ技術が取り扱われている。

(8) 大矢敏範「スキーの高飛に就いて」²⁰⁾ (大正9年；北大『文武会々報』第88号)

これは *How to Ski* を参考にしてはいるが、これまでのように外国書の翻訳ではない。大矢が体をこわしジャンプすることに対してドクターストップがかかっていた時に(後に詳述)、自身のジャンプ体験をもとに実践的な研究の結果をまとめたものであり、日本のジャンプ史にとって記念すべき技術論文であるといえる。

(9) 『スキージャンピング』²¹⁾ (大正11年；廣田戸七郎)

これは北大スキー部が、それまで取り組んできたジャンプ技術の研究をまとめた専門的研究書であり最初のジャンプに関する単行本であった。(図6)にある目次をみれば分かるようにジャンプに関する総合書であり、ジャンプの起源、技術上の変遷から始まって、ジャンプ台や服装及び用具、練習方法から審判法まで幅広く載せられている。

廣田はこの書に記されているジャンプ史の中で「日本で最初にジャンプスキーを研究したのは、大正3年頃の大矢敏範である」と述べている。

(10) 『拾五周年記念誌』(大正15年；北海道帝国大学文武会スキー部)

廣田の『スキージャンピング』が発表されて4年後、北大スキー部から15周年記念誌が発刊された。これは黎明期後に発行されたものではあるが、多くのジャンプスキーに関する論文が掲載され、それによって黎明期に北大スキー部がジャンプスキーをどのように産み育てたかがよく解る。

まず、廣田論文の「考慮せられたきスキージャンピングの将来」²²⁾と「Traekke hop と Gelandesprung とに関する研究」⁹⁾から見ていこう。前者には「スキージャンピングがスキー術の蘊奥であり而して『スキースポーツの王』であるといふことは、何人も認むるところである」²²⁾と、ジャンプを最大級に賞賛する文から始まって、飛型と飛距離の課題と展望などが記されている。後者には、先にも引用したようにスキージャンピングの歴史が述べられている。次に緒方直光は「ジャムパアとしての経験より」²³⁾という論文で「木原と大矢が我が国のスキージャンピングの開祖である」と二人を讃えたあと、技術的な発展過程と今後の課題を論述している。

スキージャンピングの起源	(一)
技術上の變遷	(六)
一般發達の概況	(二)
各國スキージャンピングの過去及び現在	(三)
北歐のスキー界	(一)
中歐・南歐のスキー界	(二)
英國のスキー界	(三)
米國のスキー界	(四)
我國のスキー界	(五)
ジャムピングヒル	(三)
本質的事項	(三)
ジャムピング斜面の選擇	(三)
斜面の加工と飛躍臺の建設	(四)
斜面の雪質の状況と其修理	(五)
ジャムピング用スキー	(六)
スキージャンピングの服装と附屬品	(七)
ジャムピングテクニック	(七)
スタート	(七)
クローチングダウン	(八)
サツツ	(八)
フライング	(九)
ランディング	(一〇)
練習方法	(一〇)
外國のジャムパアの練習方法	(一一)
練習方法について	(一二)
屋内練習方法	(一三)
屋外練習方法	(一四)
審判法と審判規定	(一五)
スタイルとジャムパア距離	(一六)
審判規定	(一七)
ノルウェーの審判規定	(一八)
北海道帝國大學文武會スキー部審判規定	(一九)
附 録	(二〇)
スキージャンピング参考書	(二一)
スキージャンピングに用ふる術語	(二二)

図6 日本初の専門的研究書『スキージャンピング』の目次

さらに伴素彦は「ランディングテクニックの研究」²⁴⁾、大矢敏範が「本邦スキージャンピング創始時代の研究の憶出」²⁵⁾(以下、大矢の「憶出」)などスキー部創設後のジャンプに関する論文を記述している。

第三章 ジャンプ事始め

第一節 先行研究

次にジャンプの草分けについて論考してみたい。先ず日本で最初にスキージャンプを始めたのは誰か。西沢勝次は「スキー術中にジャンピングなる技の存在すると云ふ事はレルヒ少佐時代から聞かされている。けれ共少佐自身も吾々には示して呉れなかった」²⁶⁾と述べている。一方、坂部護郎は、明治44年に高田でレルヒにスキーを学んだ学習院の生徒、二荒芳徳や三井高公等を、

わが国ではじめてジャンプしたのもこの連中だった。外国からきた絵葉書を見ると、ストックなしで飛んでいる。…(中略)…薬師山のいつもは石段のある急斜面に高さ一尺ばかりの跳び台を造って飛んだものである。だから飛躍距離一米というありさまだった²⁷⁾

と記述している。これによると、彼らはレルヒに教えられたのではなく、絵葉書を真似てジャンプしていたという。このようなことから、従来「レルヒは高田でリリエントフェルトスキー技術のみを教えた」ということが定説になっている。しかし、(図7)のようにレルヒ講習を受けた山口がクリスチャニアやテレマークなどノルウェー技術も指導されたことと記しており、「十七、空中跳飛法」²⁸⁾とあるようにジャンプもそれに含まれていた²⁹⁾のである。もちろん、翌年の旭川スキー講習会でもレルヒがそれを伝達したことは当然であった³¹⁾。

ところで、レルヒが日本で指導していた頃、世界のジャンプ技術は突起した小丘を飛び越える(ノルウェーにおいてOp Traekke又はTraekke hopと呼ばれていた)技術から、飛距離を争う技術に分離していたことは既に述べた。当時の日本では小丘を飛び越える技術を「飛躍」、

練習科目の主なるもの左の如し	
學科	
一、沿革効用	二、スキー及附属品の効用並に製作法
三、スキー保存法、修理法	四、スキー塗料
五、被服器具及旅装	六、氣象の積雪に対する感響
七、災害の種類徴候及危險予防法	八、スキー用教育法
九、連山地通過法	十、行軍旅行心得
十一、雪中宿營法	十二、重荷負担法及物品置搬法
術科	
一、スキー攜帶	二、スキー着脱法
三、杖の使用法	四、転倒起立法
五、直立	六、行進及横歩
七、方向交換	八、登行諸運動
九、滑降	十、滑降中遽止
十一、制動滑降	十二、弧形滑降
十三、横滑	十四、危險救急法
十五、障礙物通過法	十六、野外休憩法
十七、空中跳飛法	十八、諸國特殊滑降及遽止法
十九、各種遊戲及競技	

図7 レルヒによる高田スキー講習会の練習科目

飛距離を争うジャンプを「高飛」とか「飛行」(鶴見)、「空中飛行」(金井)等と呼んでいる。本論文では、当時北海道で飛距離を争うジャンプを「高飛」と呼んでいた^{たかとび}ので、以下それを用いることにする。

レルヒが高田や旭川で実技指導し定着した「空中跳飛法」は、飛躍であって高飛ではないようである。既に述べた如く、山崎が大正4年2月に北大スキー部主催の競技会で2m程の溝を跳び越える障害物競争を「我が国におけるスキージャンピングの草分けである」(以下、山崎説)と記述し、その後あちこちに引用されている。しかし、この障碍競走は障害物を跳び越えるものであるからレルヒが指導した飛躍であった。北大スキー部の競技会でみれば山崎説の前年、つまり大正3年にも障害物競争³⁰⁾として飛躍を行なっている。従って、大正3年とすべきものを大正4年と記し、飛躍から高飛が分離する以前なら兎も角、すでに分離していたので飛躍はジャンピングと区別されなければならない。ゆえに「ジャンピングの草分け」とはならないので山崎説は二重の誤りを犯している。

その後、Hannes Schneider の発案したアールベルグ・スキー技術³¹⁾が世界に普及すると共に「飛躍」技術は、^{ゲレンデシュプルング}Geländesprung と呼ばれるようになっていった。その技術が日本にも伝わり、ゲレンデシュプルングというタームが一般的になり、今日に至っている。日本におけるゲレンデシュプルングの嚆矢、すなわち飛躍の始まりはレルヒが指導していた明治44年の高田スキー講習会であった。

第二節 高飛の始まり

日本に高飛が最初に紹介されたのは、いつだったのかを見ておく。既に、学習院の二荒等が明治44年に絵はがきをみてジャンプしたことは述べたが、それより15年も前の1897年(明治29年)12月に発行された雑誌『少國民』に「スキ」馳けと題してイラスト(図8)入りで記されていた。

「スキ」馳けなるものは長距離を飛び得たるものは勝を占むるものとす。而して其着地点には、勿論雪を積み置かざれば能はず。さもせざれば競技者は足部を傷つくべきや必せり³²⁾

さらに続けて世界一飛んでいたミッケル・ハムスベット氏は、かつて102フィート[約31m]の大距離を記録していると記述されている。

では、実際に高飛を行ったのは誰だったのか。秋野武夫は、「数あるスキー競技種目のなかで、戦前から世界に伍する、あるいは少なくともいどんできつづけたといえるのは、ジャンプのみであろう」³³⁾と述べて、事始めについて次のように記している。



図8 雑誌『少國民』

大矢敏範が大正4年に外国文献か

らスキー・ジャンプの方法を知りスキー滑降中に偶然飛び上がった体験から、本格的に研究し始めたのが日本のスキー・ジャンプの初めであった³³⁾

さらに、廣田は「日本で最初にジャンプスキーを研究したのは、大正3年頃の大矢敏範である」と述べている。廣田は、最初に北大スキー史をまとめ、後に大きな影響を与え、大正15年の「部の歴史として」³⁴⁾にも引用されている(後述)。さらに「ジャンプを初めてやったのは大正六年、大矢敏範」³⁵⁾と真鍋晃雄が記述しているが、この様に見てくると開始年は異なるが、大矢敏範であったという点では一致している。大矢自身も、次のように記述している。

私は初めノルウェーのジャムピングの活動写真をみて大いにその壮快に打たれてゐた。それ以来種々それに関するものもながめ小さいシャンツェを作つて簡単なジャムピングの練習をしてゐた³⁶⁾

以上のことから、大矢敏範が日本における最初のジャンプ研究者(ジャンパー)であると考えて間違いない。

第三節 大矢敏範(写真1)

大矢のスキー歴を見ながら、大矢がジャンプを始めた時期について推考してみたい³⁷⁾。大矢は、1896(明治29)年3月21日に富山県で生まれ、8歳の時に小樽に転居して来た。花園小学校高等科に編入し、明治42年に小樽中学校(現小樽潮陵高校)へ入学した。(以下、表1参照)

①明治44年3月に外国の活動写真を見て、三尺位の板でスキーを作った。②バレット氏にスキーの作り方(先を曲げることや締め具の方法など)を聞き、翌45年1月に二台目のスキーを作成した。③それを履いて山の上から滑降し、ステミアーム(制動回転)位ができるようになった。これは大矢が17歳(小樽中学4年生)の頃であった。④翌大正2年2月、小樽スキー倶楽部(大正元年10月28日創立)主催の講習会で歩兵第二十五連隊の中澤治平少尉(レルヒの旭川スキー講習を受けた)から直滑降、回転などと共に飛躍を習った。⑤大正2年5月に小樽中学にスキー部が創られた時、大矢は既にスキーの熟練者であり、しかも最高学年であるということから初代部長に推された。大矢の回顧文「昔噺」によれば、

此[中澤少尉の講習会]を境として技術的に躍進したのである。小樽公園の正門から山にかけてスキーボイズの練習地で密柑箱を骨にして雪をつんでシャンツェで兎に角ジャムプをやりスウィングで止まることを



写真1 大矢敏範

表1 日本ジャンプスキーの功労者・大矢敏範の年譜（中浦皓至製作；2001.11）

年	年号	年齢	記 述
1896	明治 29	0	富山県東砺波郡鷹栖村に三男として生まれる（3月21日）
1904	37	8	小樽に転住
1906	39	10	小樽区花園小学校高等科に編入
1909	42	12	小樽中学校（現小樽潮陵高校）入学
1911	44	14	□スキーの映画をみて自家製のスキーを創って飛ぶ
1914	大正 3	18	小樽中学校卒業（3月19日）北大予科入学
"	"		□三角山において雪の飛台でジャンプ練習
1915	4	19	□北大スキー部大会の障害物競争（ジャンプ）で優勝
1916	5	21	□木原が助っ人に、スキー部員にジャンプが普及し始める
1918	7	23	北大予科卒業（7月6日）、本科（農芸化学科）に入学
1920	9	24	論文「スキーの高飛について」（日本初）を発表
"	"		□小樽商業学校（現小樽商業高校）の仮設飛台で21m 飛ぶ
"	"		□小樽町（現共和村）で北大スキー部がジャンプ合宿
1921	10	25	北大卒業（3月31日）
1922	11	26	千葉県望陀農学校（現木更津高校）教諭となる
1932	昭和 7	36	小川良恵と結婚
1941	16	45	千葉県茂原農学校校長となる
1942	17	46	海軍司政官としてセレベス島に派遣さる
1950	25	53	福島県会津短期大学教授となる
1963	38	66	北海道女子短期大学（現北海道浅井学園大学）教授となる
1970	45	73	死去（3月31日）

知って盛んに活躍してゐた³⁸⁾

というから、明治44年にノルウェーの活動写真をみて飛ぶために手作りのスキーを始めた。2年後の大正2年2月、小樽スキー倶楽部主催のスキー講習会で中澤少尉に飛躍を習ってから本格的に飛べるようになっていった。大矢はそれ以前から自分で飛んでいたの、中澤が教えた飛躍の技術を高飛に応用したのであろう。彼は小樽中学第9期生として大正3年3月に卒業、同年9月に北大予科に入学した。

以上のことから、大矢の高飛は、まだ小樽にスキーが導入される前の明治44年に外国の活動写真をみて始め、大正2年から本格的に取り組まれた、というのが正しいようである。先に見た大正3年ないし4年の開始説（真鍋の「六年」説は論外）は、北大に入学した後の大矢を見て書かれた歴史である。北大に入学する2年前から小樽で大矢は始めていた。場所についても従来は、当然北大のホームゲレンデであった「三角山」となっているが、正しくは大矢がいうように「小樽公園の正門から山にかけてスキーボイズの練習地」である。

大矢の実家は岩雄登^{いわおのぼり}（硫黄山、現イワオヌプリ）の麓で大きな農場を持っていたが、小樽中学校には小樽の真栄町^{まさかえ}にあった家から通っていた。従ってスキー練習地は真栄町の自宅に近かった。

先日（2001年5月）、小樽郷土史家の水口忠に案内されて現地を踏査してみた。水口によれば、潮見が丘（現在の真栄町2）の亀田の山（沢）付近ではないかという。地形的には小さなジャンプ台なら造ることができる斜面がある（写真2）。今はそこにも住宅が建っているが、かつて

小樽中学校のスキー授業も行われていたという³⁹⁾。

大矢が北大に入る前の小樽中学時代に、そこで友人の北川誠や山崎憲らとジャンプを始めていた。これが大矢のジャンプの始まりであり、同時に日本のジャンプの嚆矢でもあった。「アンマリ反り返ったシャンツェ」を作ったので、空に跳ね上げられ頭から落ちたり、友人が両足を折ったりしている。「スキーは足を折るとか怪我をす」と云う風説が一般にあってみな警戒してみた」³⁸⁾ので、小樽中学



写真2 ジャンプ発祥地

スキー部の創設された頃には、ジャンプは部の活動として取り入れられずにもっぱら天狗山や円山、毛無山などにスキー登山をしていた⁴²⁾。

大正3年9月、大矢は北大予科に入学してから自分で雪の台を作り、飛び方も独自に考え、ガタガタと金具の音がするアルペン式スキーで練習していた。スキー部にジャンプ技術を解説した何冊かのスキー参考書が備え付けられてあることを知り⁴³⁾、それをひもといた。解らない箇所をカラーに解説してもらい、サッツやランディングの姿勢を中心に研究した。このように1シーズン目は、空中に浮き上がる壮快さにひかれて一人でジャンプの練習に熱中した。ときたま何人かの友人が大矢の練習に加わったが続かなかった。

誰もジャンプには賛成してくれなかった。只時折二三人の方も来られた。然し雪の中へ埋まって白熊のようになって眼鏡はとぶし帽子は飛ぶ悲惨な転落の姿を見ては誰もあまり喜ばなかった。そのうち十五米突近くもゆくようになってから空中の姿勢がうまく行かなかった
...⁴⁰⁾

大矢は孤独な練習を続け腕を回転させる方法を発見して15メートルも飛べるようになっていた⁴⁴⁾。大正4年2月、円山で開かれた北大スキー部主催第2回スキー大会は、大矢にとって初めての競技会だったが、障害物競争（山崎説の「ジャンプの草分け」）で第1着になった⁴¹⁾。これは高飛ではなく飛躍であったので、大矢にとっては普段の練習と比べ簡単なことだったのである。

第四章 北大スキー部のジャンプ

第一節 木原均（写真3）

このような大矢に翌4年シーズン、強力な助っ人が現れた。北大スキー部の木原均である。後に伊黒正次が、木原を次のように評している。

先生〔木原〕は札幌のスキー、特にジャンプの草分け、
 ということは日本のスキージャンプの草分けに通ずる
 歴史的存在である。先生が札幌でスキージャンプに興
 味を持たれたのは大正元年、当時北大のスイス人講師
 ハンスコーラー氏のドイツ語のレッスンの時に、ス
 キーをはいてシャンツェから飛び出すと二十五メー
 トル程を飛ぶという話を聞かれたのが、その原因だそう
 である。それからコーラー師持参のスキー専門書「Der
 Ski」を唯一の宝典として、シャンツェの何たるかを知
 る⁴²⁾



写真3 学生時代の木原均

さらに「〔木原は〕コーラーから欧州にはスキージャンプ
 という競技あることも紹介され、詳しく知りたいなら、これを読めと渡された『デル・ウイン
 テル』に魅せられてスキージャンプのなんたるかを知った。」⁴³⁾ それからシャンツェ建設や、
 ジャンプ用スキーを市内の馬櫓屋に作らせるなど日本における組織だったジャンプの研究が始
 まった、と伊黒は述べている。

木原は、明治26(1893)年に東京で生まれ、東京市立芝白金小学校に入学し麻生中学校を卒
 業した⁴⁴⁾。大正元年9月、東北帝国大学札幌農科大学予科に入学し恵迪寮に入り、創立間もな
 い文武会スキー部の部員となる。稲田や角倉などスキー狂の面々に、主にアルペンスキー技術
 の手ほどきを受けた。一方でコーラーからドイツ語の授業時にジャンプスキーのあることを聞か
 され、コーラーに紹介されてスキー専門書 *Der Schi* を参考に黙々と理論研究に打ち込んだ(表2
 参照)。木原はスキーを単なる遊びとしてではなく、理論的に分析して科学として考えようとし
 ていた。北大スキー部に創設直後からスキーを学問的に考えようとする気風が作られたのは、
 北大が最高学府であったからだけではなく、パイオニアとしての木原の影響が大きかった⁴⁵⁾。

二人は同じ頃ジャンプに傾倒していたが、理論を重視してスキー技術を追求していた木原と、
 実践的に技術を研究していた大矢の出会いは大正4年であった。大矢が北大に入った最初の
 シーズンは、大矢の自宅が小樽にあった関係から小樽で練習することが多く、札幌にいた木原
 の目にとまらなかったようである。二人が出会った後に木原は、「君此からはジャンプの時代だ。
 本學で此から基礎を打ち立てねばならぬから後つぎをつくらねば駄目だ。遠藤先生も一生懸命
 だ。うんとやろうではないか」⁴⁶⁾と大矢を励まし、一方北大スキー部の全員には「真実の
 シーローイファ Schiläufer となろうとするにはジャンプを練習しなければいけない」⁴⁷⁾と訴えた。その頃のこ
 とを大矢は「木原先輩のジャンプに対する情熱は実に非常なもので、自らも非常に痛快なジャン
 プピングをされた」⁴⁸⁾と述懐している。これを見ると木原自らもジャンプを相当行う理論家
 だったとも考えられる。

その頃、本場ノルウェーから本格的な技術を身につけて帰国していた遠藤吉三郎も二人に加
 わった。遠藤の帰国について「大正5年説」が定説になっているが、実際には大正3年3月に
 帰国していた。木原は、スキージャンプの始まった頃を、次のように回顧している。

遠藤先生に色々とノルウェーの話を教へられ又御実施御指導を仰いだ。実に熱心でよく要
 点をうがった御指導をいただいた、スキーによく蠟をぬらないと、ランディングがうまく

表2 日本ジャンプスキーの功労者・木原均の年譜（中浦皓至製作；2002.9）

年	年号	年齢	記 述
1893	明治 26	0	東京市で生まれる（10月21日）
1899	32	6	東京私立芝白金小学校に入学
1905	38	12	麻生中学校（現麻生学園）に入学
1910	44	17	麻生中学校卒業
1912	大正元	19	東北帝国大学札幌農科大学予科に入学（9月）
"	"	"	□スキーを始める。コラーからジャンプスキーを聞く
1915	4	22	□スキー部でジャンプの実践者・大矢敏範を知る
1916	5	23	□大矢と共にジャンプに魅せられフォームを研究
"	"	"	□大矢とスキー部員にジャンプの普及を訴える
1917	6	24	□小樽で仮設ジャンプ台を作る
"	"	"	□スキー論文「スキーに関する資料」を発表
1918	7	25	北大農学部卒業，大学院に入学
"	"	"	一年志願兵として近衛輜重兵大隊に入営
1919	8	26	□遠藤との共著『最新スキー術』を発刊
1920	9	27	□北大スキー部が小澤町（現共和村）でジャンプ合宿
"	"	"	京都帝国大学助手（理学部；10月）
1924	13	31	京都帝国大学助教授（農学部）
1930	昭和 5	37	□全日本スキー連盟技術委員長（～1938）
1940	15	47	□全日本スキー連盟副会長（～1946）
1958	33	65	□全日本スキー連盟会長（～1968）
1960	35	67	□第8回冬季五輪（スコーバレー）選手団長として参加
1964	39	71	□第9回冬季五輪（インスブルック）選手団長として参加
1966	41	73	□世界アルペンスキー選手権（チリ）国際スキー連盟理事会参加
1968	43	75	□第10回冬季五輪（グルノーブル）国際スキー連盟役員として参加
1972	47	79	□第11回冬季五輪（札幌）組織委員，スキー連盟役員として参加
1986	61	93	横浜市にて逝去（7月27日）

行かないのみならず，転倒することもわかった⁴⁸⁾

木原は「小麦の研究」業績が認められて，京都帝国大学理学部の助手となって札幌を離れるが，その後全日本スキー連盟（以下，SAJ）初代技術委員長となった。1940年には五色温泉において開かれた第1回指導員検定会では主任検定員，戦後はSAJ会長を務め，第8回から11回まで冬季オリンピックの団長や役員として参加するなど，日本のスキー界に多くの功績を残している。

第二節 仮設ジャンプ台

本場ノルウェーのジャンプを知っている遠藤は，固定したジャンプ台がなければ技術も進歩しないことを指導した。この頃，大矢は小樽から北大に通っていたので，自宅のある小樽でもジャンプに打ち込んでいた。「スキージャンプの始まった頃」に木原が，

ちょうどその頃，北大であった大矢敏範君が，独学でジャンプの練習に熱中していた。同君は小樽の出身であった関係で小樽で練習していたが，ある時遠藤先生やわれわれ数名が

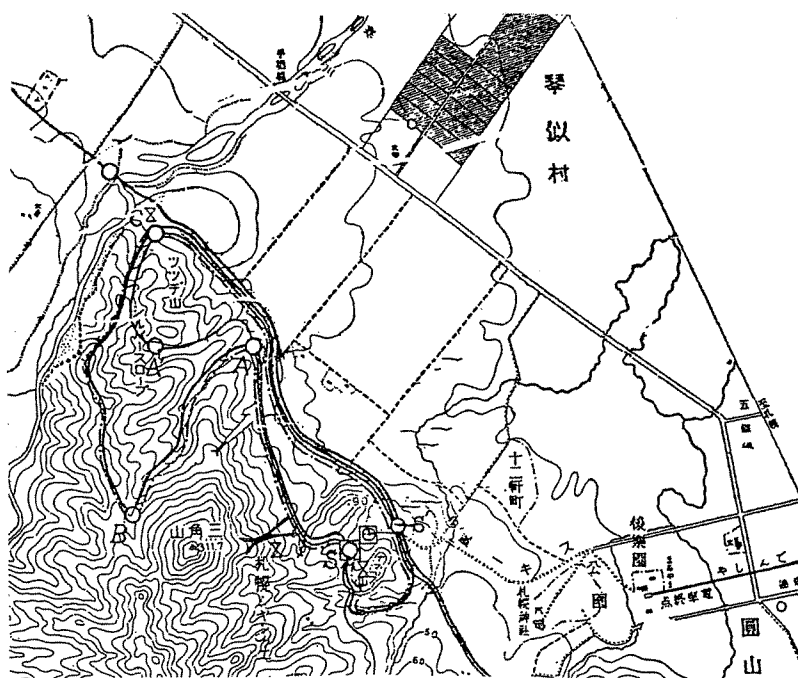


図9 三角山周辺

大矢君の練習を見に行った。そこでわれわれ一同はまず台をつくろうという事になって、小さな木造の台を完成させた。これが恐らく日本最初の仮設ジャンプ台だったろう。確か大正六年の厳冬だったと思う⁴⁸⁾

と回顧している。ここで木原は「六年」としていたが別のところで「大正五年頃と思う。これが日本のスキージャンプの初まりである」⁴⁹⁾とも述べている。遠藤の帰国後の木原や大矢の関わりからみると、赤坂が「大矢敏範がジャンプの研究に熱中していた1917年に、北大の遠藤先生の指導で日本最初の仮設ジャンプ台が小樽高商の裏山に造られた。…(中略)…[この台は]日本最初の台といわれる」⁵⁰⁾と記述しているように、小樽に日本初のジャンプ台(といっても本格的な固定ジャンプ台ではなく仮設ではあった)が造られたのは大正6年と考えられる。同じ年に北大スキー部も「此の冬から飛台を設けて大いに技術を練り、相応の成績をあげる心算である」⁴⁷⁾、「今年度から正式に飛台(シャンツェ)を作ってジャンプのレコードを残す」⁵¹⁾と木原らが意気込んでいた。しかし、実際に北大が「予算を得たので之を期に円山山麓の南に飛躍台を作った」⁵²⁾のは、大正7年になってからである。場所について、ここに「円山山麓の南」とあるが、後に大野がさらに詳しく「琴似のシルバースロープ」⁵³⁾と記述している。シルバースロープとは三角山の北に張り出した尾根にあるツツジ山付近のスキー場である。仮設といえども飛台を作ったことにより遠藤の指摘通りジャンプ技術は飛躍的に伸び始めた。

一方、小樽では大正7年2月11日、小樽庁立商業学校(現小樽商業高校、以下庁商)の第2回スキー大会に北大の遠藤、大矢、大宅が招かれて、午後遠藤が選定した斜面にジャンプ台が作られ大矢や庁商の中村らがジャンプした⁵⁴⁾。小樽出身の大矢が小樽で練習していたため、その影響をうけて樽中や庁商の生徒が何人か一緒に飛んでいた。なかでも庁商の中村はめきめきと

実力をつけていた。

第三節 初歩のジャンプ技術

この頃のジャンプ技術が如何なるものであったのか簡単にみておく。

①直滑降でスタートし、飛台の15メートル程手前で両足をそろえて膝を屈し上体がかがめ腕を伸ばす、②2～3メートル手前で腕を高くあげ上体を上に強く伸ばし、③空間姿勢には、全身をまっすぐ伸ばしたまま（直立躍下）の方法と、空中に飛び出したら直ちに膝を曲げる方法がある、④着陸は一方のスキーを少し前にして前後のバランスをとりながら、バネ仕掛けのように膝を曲げ衝動を軽くする⁵⁵⁾。

木原は、大矢がジャンプするフォームを写真に撮って指導した。大矢は「いつもシャンツェの下や横に居られて写真器をもって写真をとって帰ってから逃げ道のない忠言を賜はる木原先輩の言は深く印象している」³⁶⁾と回顧している。木原がコーチして大矢が飛ぶというように二人で本格的にジャンプの研究を進めた。このようなことから、後にスキー部の後輩ジャンパーである緒方は「木原、大矢は吾國スキージャンプの開祖である」⁵⁶⁾と評している。

北大スキー部では、スキー登山中心の部員を「山党」、平地滑走やジャンプ・スラロームなどを専門にする部員を「畑党」と呼ぶようになっていった⁵⁵⁾。北大スキー部は、三十周年史に「創設以来取り組んできた直滑降やテレマーク、クリスチャニアなどの技術がほぼ完全にマスターできるようになっていたことも、それまで書籍で見たり話で聞いていたジャンプに目が向けられるようになった要因であった」と記述している。しかし、真の要因は木原や大矢らの苦勞が功を奏してきたことによりジャンプを志す者が増え始め、組織的に取り組めるようになっていったもの、と筆者は考える。この頃、畑党の練習種目のうち特にジャンプは「スキー術の蘊奥であり而して『スキースポーツの王』であるといふことは、何人も認むるところである」²²⁾という主張が浸透し、「最高のスポーツである」と考えられるようになっていた。

しかし、大正8年には木原が兵役に服し、大矢が肺炎にかかり校医から「シャンツェからは遠のかにや駄目だ」⁵⁷⁾といわれ静養することになり、中心人物を失ったスキー部のジャンプ活動はやや停滞し、ジャンプの研究もそれ程進まなかった。

後に「この頃からスキージャンプの研究が行われた」⁵⁸⁾と記述されているのは、広田がいうように北大スキー部がジャンプを部のひとつの研究テーマとして本格的に行うようになった大正8年度シーズン（大正8年末）である。

第五章 ジャンプ競技の開始

第一節 研究から普及へ

8年度シーズンは、ジャンプ史上にいくつかの画期的なことがおきている。①先ず三角山に木材で組み立てた飛台の他に軽川にも作られ、北大スキー部が組織的に毎土曜日の午後、ジャンピングを行なうようになったこと、②大正9年1月15日から2月23日まで、畑党の部員（並河功、後藤一雄、緒方直光、廣田戸七郎の4名）が琴似で記念すべき第1回のジャンプ合宿を行なったこと。しかし、この時は初歩的な練習で12、13メートルを飛ぶのが関の山であった。期待したほど成果があげられなかったのは、初めての合宿であったことの他に、それまで活躍していた大矢の体調が回復せず、兵役中の木原も参加できなかったことによるものである。③

大矢はドクターストップのかかっていた間に、ジャンプの技術論文「スキーの高飛について」をまとめて発表している。

スキーの飛躍はスキー花であります。此の壮麗な選手競技の見られない内は本道のスキーも幼年時代であります。どうかして私は一日も早く大胆にして深慮ある人々によってジャンプの完成せられむ事を望み且期して不及ながら此の稿を公にする事に致しました⁵⁸⁾

という書き出しから、飛台などの設備や飛揚法、練習法などを論述している。この研究は、前述した如く *How to Ski* の挿し絵がそっくり引用されていることからみて、それを主文献にしたものと思われる。これは、大矢がそれまで積み上げた実践の結果をまとめたものであるが、わが国で最も早いジャンプの総合的な技術論文といえる。

このシーズンの中頃には回復した大矢と兵役を終了した木原がジャンプ練習に復帰、北大スキー部のジャンプ陣は緒方や廣田の他、青柳、向井など充実したメンバーになっていた。さらにこの頃、札幌各中学校、鉄道、道庁などのスキー部が活発に活動するようになり、北大に指導の要請が来るようになった。北大スキー部は依頼を受けると自分たちの練習を犠牲にしてコーチに出かけた。例えば、「同年〔大正九年〕二月、小樽庁立商業学校のスキー大会に招聘を受けた際には大矢敏範氏已に約廿一米の当時に於ける驚異的レコードを作り」⁵⁹⁾とあるが、この小樽庁商スキー大会（2月21日）には遠藤、木原、大矢らが招かれ、大矢は遠藤の指導で作った木材の飛台で21メートルという、当時としては「大記録」を作っている。さらに、遠藤、木原、大矢らは小樽中学にも指導に招かれている。この頃、樽中には南波初太郎を筆頭に杉村麟太郎、秋野武夫、安達正治、村本金弥らジャンパーの後継者が潮見台近くのシャンツェで飛んでいた。さらに、小樽高商も讃岐梅治、丁野、渡辺らが本格的にジャンプに取り組んでいた⁶⁰⁾。

2月22日、北大スキー部主催の第8回スキー大会が手稲山の千尺高地で開かれる予定であったが、吹雪のため中止になり、そのかわりジャンプのフォーム研究を行った。翌23日には、

〔昨年〕琴似ツツジ山の一丘陵〔シルバースロープ；図7〕に二尺巾の二間板三枚を部員総出で運搬し、〔木製の20m級の〕シャンツェを取り付けた所でジャンプ大会を開催したが、記録は十二米位〔正確には稲積が48呎〈約14.6m〉〕に止まった⁶¹⁾

その頃の世界記録は、すでに60メートルに達していた。「日本のジャンプはモット研究せねばならぬ」と木原は奮起し、「〔大正9年〕3月25日から31日まで6日間小澤町に木原学士、大宅スキー部長〔正しくは主任〕ら約10名が合宿を行な」⁶²⁾った。

参加者は木原をリーダーに大矢、緒方、廣田、岡見、岩井らであった。小沢駅前の荒井旅館を根拠に村外れの妻神スロープに1メートル位の雪台を作り、木原がジャンプする大矢たちのフォームをカメラに収めた。夜はその乾板を押し入れの中で現像する。それを見せながらスキーの原書と比較し、木原は「モット体を前にかけて」、「両スキーをそろえて」などとフォームの指導を行なった。後に、この合宿を小川玄一が、次のようにまとめている。

海外の書を唯一の指導者として専らフォームの研究に意を注ぎ、クローチングダウン、サッツ、フライト、ランディングと言ふ風につぎからつぎへと研究を為し実に涙ぐましい程の苦

心と困難によってやうやく
今日のジャンプでの基礎を
築きあげる様になった⁵⁹⁾

なぜ、札幌から遠く離れた辺鄙な小沢が合宿地に選ばれたのか。これについて「小沢には大矢さんという牧場主の息子さん
が北大生で居られたから、ここを根拠とされたもののようです⁶²⁾と遠藤源四郎が述べている。さらに大矢本人が回顧の中で次のように述べている。

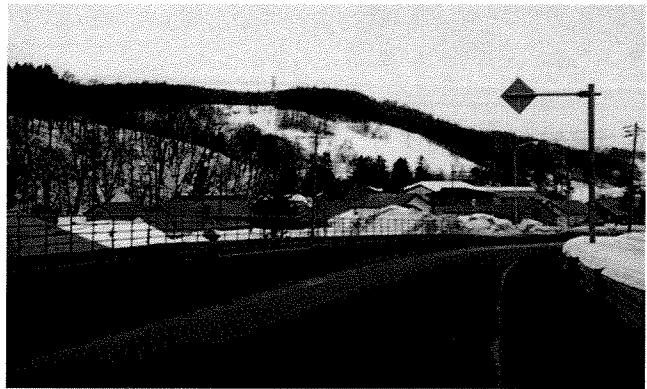


写真4 ジャンプ合宿の妻神スロープ（正面）

「肺炎で静養していたが、なかなかよくなりません」この不幸な僕の為にみんなわざわざ「それならば大矢さんの村の家へ合宿して練習しよう」ということで小沢村の暗い不便な荒井旅館にきてくれた⁶³⁾

2000年2月、筆者は小沢の合宿地を捜すべく足を運んだ。共和町役場の宮崎勝雄によれば、既に「荒井旅館」はなくなったという。しかし、妻神スロープは、函館本線 JR 小沢駅の 500 メートル程前方、国道 12 号線をはさんだ正面の斜面であると教えてくれた（写真 4）。尚この時、かつて大矢俊範のことを研究した同町の菅原博教育長に会い、大矢の履歴など資料を入手することができた。

第 8 シーズン、北大スキー部主任の加納一郎は「文武会スキー部報告」に、「今後スキーの飛躍は登山滑走と相俟つて益々発展すべきものにして遠からず世界の記録と比較し得べきに達せん⁶⁴⁾と決意を述べている。

シーズンが終わった 5 月、大井上初代スキー部長が京都大学に転出することになり、並河功が二代目のスキー部長に就任した。並河は北海道のスキージャンプの創始期に学生の後藤一雄や広田、緒方らと一緒に合宿をするなど「ジャンプを大きな収穫にまで導かれたのは [並河] 先生の活動的大努力に與つて広大なりと云はねばなるまい⁶⁵⁾と評価されている。

一方、同年 10 月には、木原も札幌を離れることになる。

第二節 固定ジャンプ台の建設

(1) 日本初のシャンツェ

大正 10 年度も、北大スキー部は琴似に 1 ケ月という長期間の合宿を実施した。中野主任は「進歩は大なるものであった⁶⁶⁾と報告しているが、遠藤教授の他界や木原がいなくなる等の他に、悪雪になるやうで記録は 15 メートルから 20 メートルとほとんど伸びていない。この頃中野は、札幌も小樽のように学校の近くに良好なシャンツェがあれば、と嘆いている。

北大によって作られた仮設シャンツェは、自然の地形を全く加工していないために、せいぜ

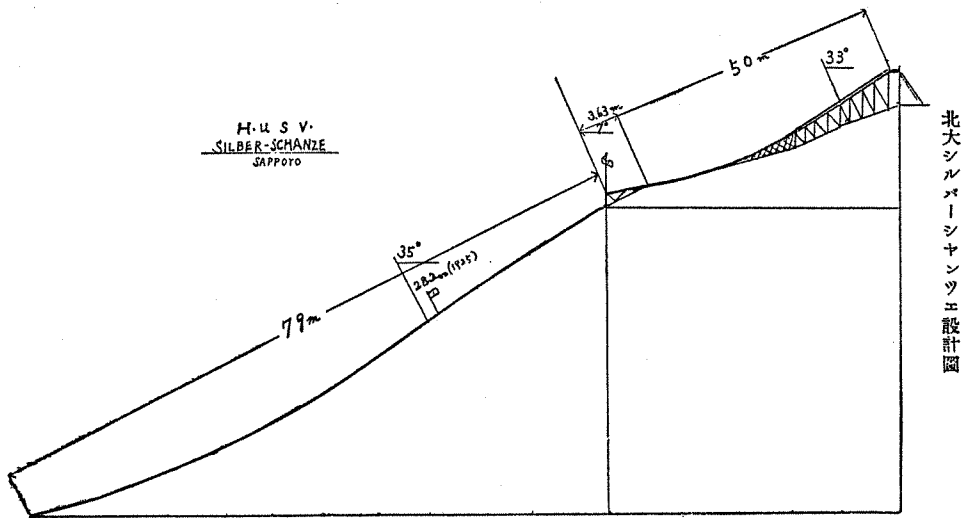


図10 シルバースャンツェ

い20メートルしか飛べなかった。せめて30メートル位飛べる台が欲しいと願って運動していたが、大正11年度にやっと認められ、少額ではあるが予算がついた。なにしろ我が国で初めてのことであり、着工までにも幾つかのハードルを越えなければならなかった。先ず、場所を選ぶ問題である。理想的な場所として、(1)市街地に近い、(2)冬期間風あたりが少ない、(3)工事費がなるべく少なく済む、(4)雪解けが早い南向きスロープでない、(5)全長140メートル内外ある、(6)地主の反対により整地できないということがない、などの条件があった。何度かの測量の結果、これらの条件に最も近い場所は、三角山の北側にあるシルバースロープの東側斜面であることがわかった。世界的に有名なシャンツェと較べると、そこはスイスのダボスのジャンプ台の地形に似ていることがわかり、ダボスのそれをモデルに設計図を造りあげた⁶⁷⁾。

次は、お金の問題である。書き上げた設計図で建設業者に経費を見積もらせたところ、予定価格をはるかに越える約2000円になった。予算の三倍以上の巨額な費用がかかるのでは、とても実現不可能である。仕方なく設計図を修正して経費を下げ、業者にまけてもらって560円まで引き下げることができた。その内訳は、盛り土約80坪(360円)、切り土約60坪(108円)、シャンツェ木造建設費(20円)などである。それをスキー部の予算から260円、山とスキーの会から130円と諸先輩の寄付で170円を集めることになり、やっと予算の目鼻がついた。

このようにして12月5日に漸く始められたが着工してみると、シャンツェの上下10メートルの地点に非常に硬い岩盤があり、変更せざるをえなくなった⁶⁸⁾。さらに、例年になく降雪が早く工事は困難となり、未完のまま第一期工事を終わらざるを得なかった。完成しなかったとはいえ、このようにして三角山に日本初の固定シャンツェがつくられた(図10)。

明けて1月6日には、このシャンツェのこけら落としが行なわれた。ランディングバーンの平均傾斜30度、80メートルという大規模なシャンツェにジャンパーは恐怖心を抱いた。そのため消極的になりほとんどの者は転倒し、転ばなかったのは緒方直光ただひとりであったという。もともとこのシャンツェは、ヨーロッパの水準に追いつくための施設として造られたが、それにしてもいきなり大型過ぎたのである⁶⁹⁾。

翌12年12月、第二期工事として10日間でアプローチと飛台位置の斜面を加工した。さらに

翌13年にも第三期の工事が行なわれ整備されたが、北海道で最初に建設されたこのジャンプ台はシルバーシャンツェ（写真5）と名づけられた。当時の北大スキー部報には、つぎのように記されている。



写真5 シルバーシャンツェ

アプローチ五十米、スタート地点が三ヶ所設けてあり、最上位のスタート地点から約二十米の間に木組で

櫓やぐらを組み立て、頂点の所は丘陵の地点から四メートル米の高さがあり、アプローチの最大傾斜は三十三度、斜面になる部分は板張りにしてある⁷⁰⁾

後に村本金彌は「フライトは高く、シャンツェを離れると丁度千仞の谷底へ落ち込む感があり、腹の中が皆其の俣もって行かれるような気がしました。従って着陸の際のショックも実に物凄い限りで、立つ方が少なく転ぶ方が多かった⁷¹⁾」と回顧している。三ヶ所設けられたスタート地点で頂上から出る者は青山馨ただひとりで24メートルという日本新記録をつくった。

幾多の涙ぐましい努力が払われたが、このシャンツェには欠陥も多かった。しかし、大正14年の第2回北海道選手権大会兼第3回全国選手権大会予選会に利用されるなど、昭和8年に部練習用「宮の森シャンツェ」がつくられるまで、北大スキー部員に愛用され、伴をはじめ神澤謙三、村本金彌などの名選手を生み出したのである。

(2) 北海道山岳会のシャンツェ

大正12年、北海道山岳会(会長、林常夫；道庁)がスキー奨励のため、札幌近郊にシャンツェを建設することになり北大スキー部に場所の選定と設計を依頼してきた。それを受けて北大スキー部は先に踏査したデータをもとに、三角山に固定シャンツェの第二号を建設することになった。場所は三角山頂上からみて南東方向に派出した尾根上の鞍部小丘である。そこは、加工する経費が少なく済み、シャンツェとして理想的な地形であった。ところが常に北西の風を受け、斜面距離が約80メートルしかないという欠点があった。しかし、初心者のジャンパーを養成するためには、この規模で十分であるということと、風については築造後に防風の施設を造るということで決定した。

工事にとりかかった11月下旬、すでに初雪がきていたが、前年と違って積雪が少なかったので作業は順調に進み、12月下旬には竣工した。先にシルバーシャンツェ築造の経験者を作業員に使用したのも順調に進んだ要因であった。このシャンツェは、アプローチ約23メートル、ランディングバーン約25メートル、アウトラン20メートルという小規模な台であった。すでに未完成ながら近くに建設されていたシルバーシャンツェに対して、初級者用としていたのでアルファベットの最初の文字αをとって「アルファシャンツェ」と名づけられた⁷²⁾。

アルファシャンツェのこけら落としは、北大スキー部主催の第5回札幌中学校スキー競技

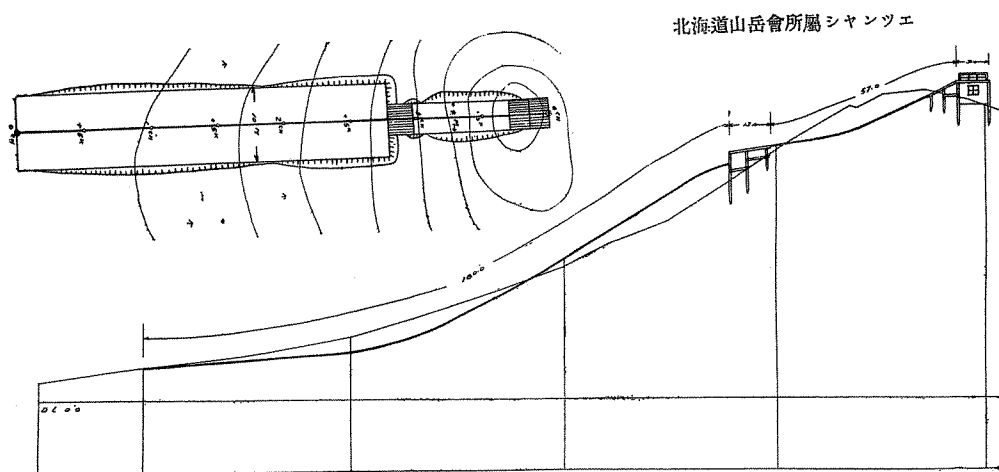


図 11 アルファシャンツェ

会⁷⁾で、大正 13 年 1 月 27 日のジャンプ大会であった。この日、初めてのジャンプ種目の単独スキー競技会ということと、一週間後に行われる北海道予選会の小手調べということもあって選手もさることながら観衆も大勢集まった。小樽中、札幌師範、北海商業、小樽商業、北海中学、小樽水産、札幌鉄道教習所、札幌第一中、札幌第二中(現札幌西高校)、札幌工業の 10 校から 3 名ずつの選手が競いあい、樽中の秋野武夫が 12.80 メートルの最長不倒距離、スタイルもいれて得点 137.54 で優勝、団体戦も同校が 193.5 点を獲得して優勝した⁷³⁾。尚、この大会は、翌年から朝日新聞社が後援して「全国中等学校スキー大会」となり、今日の「全国高等学校スキー競技会」につながっている。

大正 13 年 2 月 2 日、北海道山岳会主催第 1 回北海道スキー選手権大会が札幌で開催されたが、ジャンプ種目はこのシャンツェで争われ、12.40 メートルを飛んだ北大の青山馨が優勝した。

(3) 札幌シャンツェ

大正 15 年、第 5 回全日本選手権大会が札幌市で開かれることが決まった時、札幌市議会は三角山に三つ目のシャンツェを建設することにし、2700 円の予算を可決した。設計は北大の廣田戸七郎らが行った。

アプローチは約六十五米、最傾斜部三三度あり。櫓の最高所は地上一〇米四〇厘あり。アプローチの途中 A、B 二点にスタート点の設けあり。シャンツェ S 点より A 点までの幅五米、AB 間は四米の幅になって居る。シャンツェの傾斜は三度、幅五米、長さ二米、高さ二米である。全くネガティブのシャンツェである。着陸斜面は全長百米、着陸し得る最長点はシャンツェの端から五〇米はとることが出来ると思ふ。最傾斜部は約三〇度である。着陸斜面は殆ど自然の儘であり、僅かに左右の地ならしを行っただけに過ぎない。着陸斜面の幅はシャンツェ端直下より斜面上下方へ約一二米の間は一〇米の幅でそれより下方は次第に扇形に開き最下方は四〇米の幅になっている。着陸斜面の北側に高さ五米の審判台が一間四方設けられている⁷⁴⁾

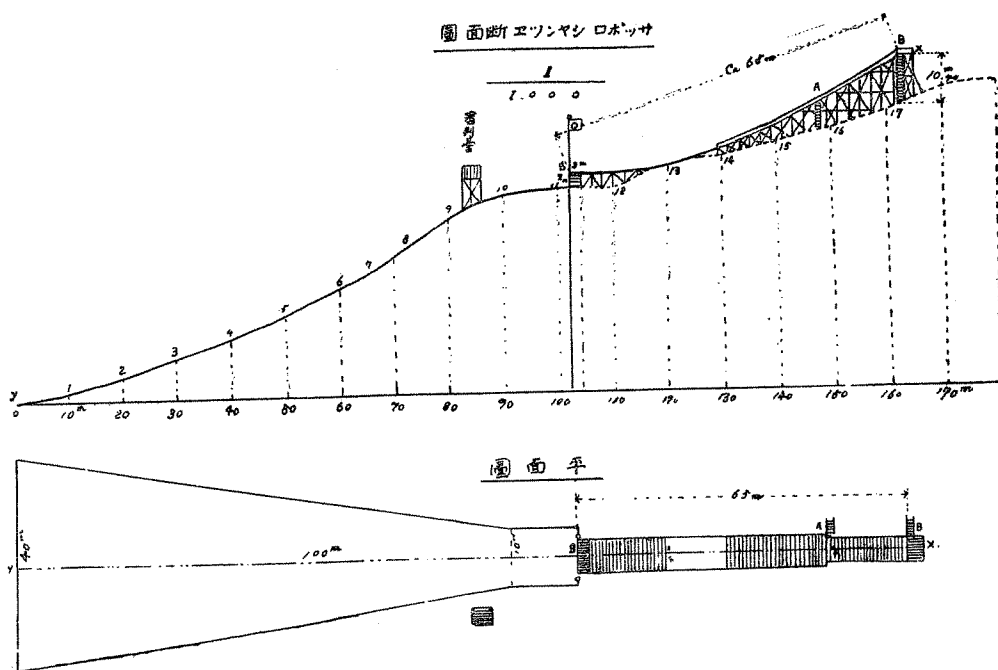


図 12 サッポロシャンツェ

と解説している。これは、理想的なランディングバーンで35メートルの飛距離が可能とされ、当時の新聞は「東洋一大シャンツェ」⁷⁵⁾と報じていた。12月に着手し翌年1月、大正天皇の崩御により年号が変わって昭和2年1月に竣工、札幌シャンツェと呼ばれた。この年は天皇の死去のため、第5回全日本選手権大会が中止になった。このジャンプ台が初めて使われたのは、翌3年1月21、22日の第5回北海道スキー選手権大会であった。

この大会では、網走から来た弱冠19歳の新人永井勝夫が26.8メートルの最長不倒レコードを出して優勝した⁷⁶⁾。このことから判るように、この頃には札幌ばかりではなく全道的にジャンプが普及し、その技術レベルも高いものになっていた。

翌2月4、5日の第6回全日本スキー選手権大会では、北大の神澤謙三が27メートルのバックケンレコードを創った。このジャンプ台は、三角山に4番目の本格的な大倉シャンツェ（今日の大倉山シャンツェの前身）ができる昭和6年まで、多くの大会で使用されていた。

以上の如く、ジャンプ技術は固定ジャンプ台の建設と共に飛躍的に発展した。北海道初の（当然、日本初でもある）シルバーシャンツェ、二番目のアルファシャンツェ、三番目に造られた札幌シャンツェは、いずれも北大スキー部が関わっていた。三つのシャンツェは、いずれも三角山にあったが、現在は跡形もない。痕跡を求めて何度か現地を踏査してみたが見つかることはできず、従って場所も特定できなかった。札幌第二中学山岳旅行部発行の『ヌタック』（第2号；1930）に掲載されている「今井呉服店屋上から見た概略スケッチ」によると、三つのシャンツェは次図のような位置関係になっていた。

績が評価された他に、北大スキー部が全面的にバックアップする体制ができていたことが大きな要因であった。本大会には、全国六地区の予選会を通過した者が出場できるようになっており、北海道予選は札幌で開くことになっていた。西谷は、本大会のリハーサルのためにという名目で、北海道予選会も同地で開かせて欲しいと嘆願し、2月3～4日に実施された。この予選会のジャンピングで一等は15メートルを飛んだ小樽高商の讃岐梅二、二等以下は北大の南波初太郎、稲積猶、緒方直光、村本金弥、青山馨であった。

本大会は、その一週間後の2月10～11日に開かれた。ジャンプでは北海道予選会で勝った小樽高商の讃岐梅二が16メートル10で優勝した⁸⁸⁾。これについて高田から来た小川勝次は、

高田育ちの私には、お恥ずかしい次第であるが、スキーのジャンプ競技とは、雪で作った台にせよ、このような大きなシャンツェ（ジャンプ台）で飛ぶということも初めて知り、かつ見たのであった。そして北海道の四、五名の選手が大胆にもこの台で飛び転倒もせずに滑り去っていくのには驚いた。「スキーの驚異」にもこんな場面はなかった⁸⁹⁾だけに驚きは一層大きい

と感想を述べている。これを見て後のスキー史家に「高田ではジャンプが行われなかった」の如く受け取られたが、実際には小樽の本大会にむけて1月20、21日に高田で開かれた信越地方予選会で1キロ、4キロ、10キロ、テレマーク、クリスチャニアの他に、同地としては初めてではあったがジャンプ競技も行われていた⁸³⁾。

2月28日、北大スキー部の大会が琴似で開催され、スキー技術の修得年限が4年以上の者(A組)で緒方直光は18メートルを飛んで優勝した。

大正12年12月、北大のシルバーシャンツェの第二期工事が終了したことや、北海道山岳会のアルファシャンツェが建設された¹⁰⁾ことについては既に述べた。

この年ジャンプ競技の統一のために、北大スキー部は平塚直秀、廣田戸七郎、緒方直光が起草委員となって「スキージャンピング競技規定」を作成した⁸⁴⁾。詳しくは『山とスキー』⁸⁵⁾に掲載されているが、これ以降今日と同じくスタイルとジャンピング距離を点数に換算して優劣を決めることになる。

大正13年1月27日の札幌中等学校ジャンプ大会¹¹⁾を北海道山岳会のアルファシャンツェで行なわれたことは既に述べた通りである。これは日本で初めてのジャンプ単独の競技会であり、ジャンプ発達史上で特筆されるべきことであろう。樽中から杉村鳳次郎、西村与三次、秋野武夫が参加し、秋野が最長不倒距離12m80をだして優勝した。この時、北大のシルバーシャンツェでなく、なぜ北海道山岳会のアルファシャンツェを使用したのかについて、本田主任は「種々の点から今年直ちに当部の飛台で飛ばむ事の尚早なる為山岳会の飛台を借りて行ふ」⁸⁶⁾と述べている。なお、『拾五年記念誌』にこの大会の開催日を「2月27日」と誤記され、北大30年史にも大野⁸⁷⁾も検証せずに誤りのまま引用している。

第二節 頻繁に開かれたスキー大会

大正13年2月2～3日に北海道山岳会主催で第1回北海道スキー選手権大会¹²⁾が三角山において開催された。スキージャンピングで一等は12m40の青山馨であった。

大正13年2月16～17日、第2回全日本スキー選手権大会(高田)では20m40を飛んだ北大

の緒方直光が優勝した。緒方は、2月24日⁸¹⁾の北大スキー部大会でも優勝している。

大正13年10月、北大スキー部のシャンツェに櫓を組んでアプローチを延長、第三期工事が終了してシルバーシャンツェと命名された。明けて1月8～25日まで琴似において畑党の合宿(参加者は伴素彦、杉村麟太郎、緒方直光、青山馨ら11名)が行われた。その間1月18日には、北大スキー部大会が琴似で開かれたが、ジャンプは荒天気のため延期された。さらに1月24、25日には第2回北海道スキー選手権大会が開催され、北大の緒方直光、小林辰雄、伴素彦が上位を独占した。

大正14年1月31日～2月1日、札幌中等学校ジャンプ大会が東京朝日新聞社の後援で全国中等学校スキー大会と改められた。この大会では、ジャンプとディスタンスレースの二種目が行なわれ小樽商業学校が優勝した。同年2月の第3回全日本スキー選手権大会(青森県大鰐)では、北大の青山馨が18m60(18.7点)を飛んで優勝した。

大正15年は第3回北海道スキー選手権大会で北大の杉村鳳次郎(18.27点)が、同年2月の第4回全日本スキー選手権大会(樺太豊原)で北大の伴素彦が22m20(18.80点)で優勝した。この頃北大のジャンプ陣(畑党)は、あらゆる大会で優勝するという状況を呈していた。

この頃に於る畑党の活動は実に目醒しきものがある。特にジャンプに於ては、各競技会の上位入賞者は全て当部員が占めて終ふ有様で、ジャンプ王国北大の名は愈々昂まるに至った。それがため、これまでスキー部のアツペンデックスと考へられていた競技が部の主流となって、逆に登山がアツペンデックスと考えられるに至った⁸⁸⁾

大正14年2月15日に全日本スキー連盟が創設され、翌年2月に国際スキー連盟(以下、FIS)に加盟した。FIS加盟に伴って、1928年2月サンモリッツで開催される第2回冬期オリンピックの招待状が届き、ジャンプでは第4回全日本大会で優勝した伴素彦が参加した。結果は転倒して最下位であったが伴は、「今までの観念を打ち破って、積極的に強いサッツと、空中の前傾姿勢とることができるようになれば、十米は余計に飛べるようになる」⁸⁹⁾と感想を述べていた。

昭和4年、ノルウェーから来日したヘルセット中尉らの指導によって、日本スキーのジャンプは伴の予想した通り、国際舞台で通用するレベルに達するようになった。

おわりに

以上、黎明期の日本ジャンプスキー史は、次のようにまとめることができる。

日本ジャンプの発祥は、明治44年に独力で始めた小樽中学の大矢敏範によるものであり、小樽が誕生の地である。大矢が北大予科に入学したことによって、大正3年に札幌、つまり北大スキー部のジャンプが始まった。一方、大正元年に入学した木原均は、コラーからスキーにジャンプ競技があることを教えられ、興味を持ち主に理論的な研究を独力で始めていた。

実践研究者の大矢と理論研究家の木原が、同じ北大スキー部員としてジャンプに対する熱い思いが同じことを知り共同で取り組み始めた。二人の出会いは、大正4年である。それから技術の発展も一段と加速した。さらに遠藤吉三郎の指導によって、固定ジャンプ台の重要性が唱えられ、先ず大正6年に小樽に仮設のジャンプ台が造られた。本格的な台の出現と北大スキー部がジャンプ合宿を行うなど組織的(畑党)な取り組みが強まったことにより、飛躍距離も伸

びるようになった。それと相まって札幌や小樽の北大生以外にもジャンプが広まり、その指導のために北大スキー部員は奮闘した。三角山に固定ジャンプツェが初めて作られ、競技規約が整備されるなど、札幌以外の道内各地にも加速度的に普及して行き、あちこちでジャンプ競技会が開かれるようになった。

大正12年、第1回全国スキー選手権大会が小樽で開かれ、競技規定の制定など北大の果たした役割は大きかった。この大会のジャンプ競技によって、ジャンプが全国各地に一気に普及していくことになる。

このようにジャンプスキーの発祥史を見ると、緒方がいう「木原と大矢が我が国のスキージャンピングの開祖であると同時に新しく造られたスキージャンピングなるものは（中略）吾が国の運動競技界に対する最も偉大なる功績と云わなければならない」ものであった。つまり、黎明期におけるジャンプスキー史上、大矢と木原の功績は特筆大書すべきである。さらにノルウェーから本場のスキー技術をもった遠藤吉三郎が帰国したことも、スポーツとしてのジャンプが大きく発展する要因になった。このような一人一人の貢献の他に、北大スキー部が組織として、①中学や職場スキークラブから指導の要請を受けると気軽に講師を派遣したこと、②スキー競技会を開催したことなどもジャンプが広く普及する大きな要因になった。

最後に、本論文を通して明らかになった黎明期における日本ジャンプスキーの歴史を、簡単にまとめると（表3）のようになる。

表3 黎明期における日本ジャンプスキー略史（中浦皓至；2002.11 製作）

西暦	元号	記 述
1911	明治 44	（3月）大矢敏範がジャンプの活動写真をみて手作りスキーでまねる
1912	45	（2月）レルヒが旭川の講習で「飛躍」（ゲレンデシュブルング）を伝える
〃	大正元	木原均がコラーからジャンプ競技を聞き、理論的な研究を始める
1913	2	（2月）大矢が小樽でミカン箱の台で飛び、高飛らしくなる
1914	3	（9月）大矢が北大予科に入学、部の洋書で孤独なジャンプ練習を続ける
1916	5	木原が大矢のジャンプを援助、ジャンプを部内にアピールする
1917	6	木原、大矢と遠藤吉三郎が小樽に初めて仮設ジャンプ台を作る
〃	〃	（4月）木原が論文「スキーに関する資料」を発表、Jumping も解説する
1918	7	札幌や小樽に仮設ジャンプ台が作られジャンプが盛んになり始める
1919	8	大矢が初めてのジャンプ技術論文「スキーの高飛について」を発表する
1920	9	（1月）北大スキー部が琴似で8日間のジャンプ合宿を初めて行う
〃	〃	（2月）大矢が遠藤の作った仮設ジャンプ台（小樽庁商）で21mを飛ぶ
〃	〃	（3月）大矢の地元・小沢町で木原をリーダーに6日間の合宿を行う
1921	10	（2月）北大スキー部が三角山に固定台（シルバージャンプツェ）の建設に着手
1922	11	（2月）小樽スキー倶楽部主催「全国大会」で高商の讃岐梅二が14.4mで優勝
1923	12	（2月）第1回全国スキー選手権大会で讃岐が16.1mを飛んで優勝
〃	〃	（12月）廣田戸七郎がジャンプ技術の専門書『スキージャンピング』を発行
〃	〃	北海道山岳会が三角山に固定ジャンプ台（アルファジャンプツェ）を作る
1924	13	北大スキー部が「スキージャンピング競技規定」を制定する
〃	〃	（1月）北大スキー部主催札幌中等学校ジャンプ大会で秋野武夫が12.8m
1925	14	（1月）朝日新聞社後援札幌ジャンプ大会が全国中等学校スキー大会となる

＜付記＞

本論文は、日本体育学会第 50 回大会（東京大学 1999）にて発表した論文に加筆修正したものである。

＜注釈＞

注 1) レルヒの教えた「空中跳飛法」は、高田や旭川で定着していた。例えば、高田でいえば大正 2 年 12 月（すでにレルヒは高田にいない）のスキー講習を受けた秋田県の山口龍輔が「ジャンプは金谷山の登山口に俵に雪をつめて作ったシャンツェを使用した…中略…高過ぎたし、一米半も出ると拍手喝采ものでした」（山口龍輔、感激の追憶、スキー年鑑 7、全日本スキー連盟、1933、p.134）といい、旭川でレルヒから直接習った三瓶らが「大正 2 年 2 月に月寒で北大生も含めた札幌の受講生に「障害物 10 m 空飛び」を教えており（中浦、前掲書 1、p.233）、小樽でも中澤少尉（三瓶と共にレルヒに習った）が小樽スキー倶楽部の講習会で伝達している。本文で西沢は、レルヒ少佐自身がジャンピングを示してくれなかった（注 26）、と記述しているが、西沢はレルヒが高田で教えた時、まだ小学生であり、直接レルヒから学んでいないのである。

注 2) 赤坂富弘が『小樽スキー連盟 70 年史』に「小樽中学の第 1 回スキー大会が大正 2 年 2 月に潮見台小学校の近くの山で行われた。この大会では雪を積んで台を作り、ジャンプ競技を行った。最も遠くへ飛んだのが大矢敏範の 13 尺（約 4 m）であった」（雪跡、小樽スキー連盟、1983、p.38）と記述している。しかし、小樽中学スキー部の創設は大正 2 年 5 月であるから、これは誤りである。尚、小樽中学の第 1 回スキー大会は大正 3 年 2 月 7 日に開かれている。

注 3) 「大矢さんは当時の二三冊の外国書しかもその中でジャンプの書いてあるのはホンの数頁で写真と云っても貧弱なのが一二葉はいついたばかりのその書物を読んで、唯一人雪で台を作り、ガタガタと金具の音のするアルパイン式スキーで練習された」（緒方、前掲書 23、p.79）とか、「リチャードソンの Ski-ruuner 一冊であつたろう」（角面子〈中野誠一〉、側面史、前掲書 9、p.289）など諸説がある。大矢本人は「北大予科に入ってから色々スキーの参考書があった」（前掲書 38）としか記述していない。

注 4) 瓜生卓造は大矢より前に北大スキー部がジャンプを始めていたと考えていて「北大出の農学士大矢敏範という人が、北大の理論以前に独力でジャンプを試みていた彼の飛距離は北大生の誰よりも上まわった。大正五、六年のことである。」（瓜生卓造、真白き夜②、スキージャーナル 第 79 号、1972、p.218）と記述している。

注 5) 中野が「山党や畑党という分類は 4 年程前（大正 5 年）から我部に慣用されたタームであって現今は殆ど全国的に使用されている」（中野誠一、大正十年度スキー部報告、文武会々報 第 93 号、1922、p.38）と記述している。

注 6) これは小樽新聞（大正 9 年 3 月 23 日）による。なお、この小沢合宿は北大拾五年記念誌に「開始日は 3 月 22 日」（前掲書 9、p.374）と誤って書かれている。そのまま引用した三十年史（前掲書 52）、大野（前掲書 53、p.21）なども同様である。また遠藤は「開始日は 3 月 26 日」（シュプール 1 号、1961、p.62）としている。本稿ではリアルタイムの新聞報道「3 月 25 日が開始日」を採用した。さらに、木原はこの合宿を「大正 7 年」（前掲書 53、p.16）と記述しているが、記憶違いによるものであろう。

注 7) 小樽中学校スキー競技会は、5 年前に小樽の中学校（現在の高校）に北大が呼びかけて始められた全国初のスキー競技会で、第 1、2 回は小樽間のスキー駅伝、第 3、4 回は手稲山麓のディスタンス競技会であった（注 11 参照）。

注 8) 当時小学校 3 年だった伊黒正次（後に日本を代表する名ジャンパーになる）の家がこの大会会場の真下にあり、見に行った少年は「鳥の如く飛んだ 16 m」の印象を、50 年後に生々しく回顧している。伊黒は同論文で、木下がジャンプを始めたとし、大矢には触れていない（日本ジャンプの神代記、月刊スキージャーナル 第 73 号、1972、p.168）

注 9) 「スキーの驚異」にはもっと大きなジャンプ場面が何度も出てくる。小川は映画「スキーの驚異」を見ていないのではないかと疑わざるを得ない。

注 10) 大野は「大正 10 年 12 月に北海道山岳会が日本初の固定ジャンプ台を完成させた」（前掲書 53、p.23）と記述している。正しくは、加納の「一九二三年には同じく北海道山岳会が固定のジャンピングヒルを築造

- した」(加納, 北海道のスキー地概況, アサヒスポーツ, 第2巻1号, 1924, p.20)である。
- 注11) 大正9年に札幌スキー駅伝大会として始められた大会は, 同11年(第3回)から軽川大曲リレーレースになり, 同13年(第5回)から札幌中等学校ジャンプ大会になった(注7参照)。
- 注12) 加納は, この大会を第2回北海道予選会と記している。(前掲書57, p.34)
- 注13) 北大拾五周年記念誌に「2月22日」(前掲書9, p.384)と書かれたため, 三十年史(前掲書52, p.26)もそのまま引用されている。

＜引用文献＞

- 1) 中浦皓至, 日本スキー・もうひとつの源流, 北海道大学図書刊行会, 1999, p.85
- 2) 西沢勝次, スキー競技法, ヘルメス社, 1925, pp.106-107
- 3) 山崎紫峰, 日本スキー年表(日本スキー発達史, 朋文社, 1936,)
- 4) 赤坂富弘, 北大スキー部五十年の歩み(北海タイムス 昭和37年11月22日～12月27日)
- 5) 竹節作太他, 競技スキー, 朋文堂, 1951,
- 6) 日本のジャンプ発達小史, 競技スキー教程, 全日本スキー連盟, 1989, p.214
- 7) Fridtjof Nansen, The first crossing of Greenland, Vol. I, 1901, p.103
- 8) 野崎彊, スキー・スポーツのあけぼの(スキー発達史, 実業之日本社, 1971, pp.74-75)
- 9) 廣田戸七郎, Traekke hop と Gelandesprung とに関する研究, (記念創立拾五年, 北大文武会スキー部, 1926, p.103)
- 10) D.M.M. Crichton Somerville, The Origin and History of ski (E.C. Richardson, *Ski-Running*, 1904, p.13)
- 11) 鶴見宜信, スキー術, 厚生堂, 1912, pp.53-54
- 12) 臼田明, 諏訪湖に於ける日本のスケートとスキーの出会い(一)(諏訪教育, 第98号, 2000, pp.122-123)
- 13) 中浦皓至他, アルペンスキー技術が創られて100年～Zdarsky 技術と発祥期の日本スキー技術の関連を考察する～(日本スキー学会誌, Vol.9 No.1, 1997, pp.111-121)
- 14) 金井勝三郎, スキー滑走, 田中铁工場スキー部, 1913, pp.65-66
- 15) スキー及びスキー術に就いて(文武会々報 第73号, 北大文武会スキー部, 1914, p.14)
- 16) スキーに就いて(文武会々報 第79号, 1916, p.94)
- 17) 木原均, スキーに関する資料(其一), (文武会々報 第81号, 1917, pp.66-82)
- 18) 木原均, スキーに関する資料(其二), (文武会々報 第82号, 1917, pp.59-63)
- 19) 木原均・遠藤吉三郎, スキー術, 博文館, 1919, pp.209-219
- 20) 大矢敏範, スキーの高飛に就いて(文武会々報 第88号, 1920, pp.64-71)
- 21) 廣田戸七郎, スキージャンピング, 1923, 山とスキーの会, p.103
- 22) 廣田戸七郎, 考慮せられたきスキージャムピングの将来(前掲書9, pp.1-12)
- 23) 緒方直光, ジャムパアとしての経験より(前掲書9, pp.78-88)
- 24) 伴素彦, ランディングテクニックの研究(前掲書9, pp.126-132)
- 25) 大矢敏範, 本邦スキージャムピング創始時代の研究の憶出(前掲書9, pp.287-291)
- 26) 西沢, 前掲書2, p.106
- 27) 坂部護郎, 黎明期のスキー物語(山と高原 254号, 1957, p.14)
- 28) 山口十八, スキー術新教育法(スキー, 第2号, 日本スキー倶楽部, 1913, p.35)
- 29) 中浦皓至, 北海道における近代スキーの発達に関する歴史的研究(北海道大学大学院教育学研究科修士課程平成13年度修士論文, 2002, p.19)
- 30) 中浦, 前掲書1, p.192
- 31) H. Schneider/A. Fank, *Wunder des Schneeschuhs*, 1924
- 32) 「スキ」馳け(少國民, 學齡館, 明治29年, p.62)
- 33) 秋野武夫, 日本のスキー・ジャンプ競技史～世界にいとむ実力を養った先人の努力～(世界スキー全集5 スキー発達史, 実業之日本社, 1971, p.295)
- 34) 小川玄一, 部の歴史として(前掲書9, pp.272-276)

- 35) 真鍋晃雄, スキー (さっぽろ文庫 7 札幌事始, 札幌市教育委員会, 1979, p.204)
- 36) 大矢, 前掲書 25, p.288
- 37) 中浦皓至他, 小樽におけるスキー草創期の研究, (日本スキー学会誌第 9 巻 第 1 号, 1999, pp.109-120)
- 38) 大矢敏範, 昔噺 (北大スキー班々報 1, 北大スキー班, 1941, p.98)
- 39) 水口忠, 潮見ヶ丘紀行(二)日本ジャンプの発祥は潮見ヶ丘(潮陵, No. 55, 潮陵倶楽部, 2001, pp.30-32)
- 40) 大矢, 前掲書 25, p.289
- 41) スキー部報 (文武会々報 第 75 号, 1915, p.146)
- 42) 伊黒正次, シャンツェものがたり (サッポロ 第 52 号, サッポロビール KK, 1972, p.8)
- 43) 伊黒正次, 日本スキー意外史第 14 回 日本ジャンプの神代(月刊スキージャーナル第 73 号, 1972, p.168)
- 44) 木原均博士年譜 (Kihara Memorial Foundation NEWSLETTER, No.8, 横浜生命科学振興財団, 1993, pp.43-53)
- 45) 木原均博士生誕 100 年記念座談会 (同上書, p.16)
- 46) 大矢, 前掲書 25, p.102
- 47) 木原, 前掲書 18, p.61
- 48) 木原均, スキージャンプの始まった頃 (北海道大学スキー部七十年史, 1982, p.70)
- 49) 木原均, 七十年前の思い出 (同上書, p.5)
- 50) 赤坂富弘, 小樽スキー連盟 70 年史, 小樽スキー連盟, p.64
- 51) 小樽新聞, 札幌農大とスキー熱, 大正 6 年 12 月 5 日
- 52) 北大スキー部三十年史 (北大スキー班々報 1, 北大スキー班, 1941, p.19)
- 53) 大野精七, 北海道のスキーと共に, 1971, p.18
- 54) 小樽新聞, 滑降あざやかなりし庁商スキー大競技, 大正 7 年 2 月 13 日
- 55) 小樽新聞, スキーなるかな(12), 大正 7 年 1 月 21 日
- 56) 緒方, 前掲書 23, p.79
- 57) 加納一郎, 北海道のスキーと山岳, 北海道山岳会, 1927, p.10
- 58) 文武会々報 第 88 号, 1920, pp.64-71
- 59) 小川, 前掲書 34, p.275
- 60) 赤坂, 前掲書 4 (北海タイムス 昭和 37 年 12 月 1 日)
- 61) 北大スキー部三十年史 (前掲書 52, p.22)
- 62) 遠藤源四郎, 老スキーマンの語る思い出話 (シュプール 第 1 号, 1961, p.62)
- 63) 大矢, 前掲書 38, p.103
- 64) 加納, スキー部報告 (文武会々報 第 90 号, 1920, p.6)
- 65) 廣田, 代々の部長さんとカラー先生 (前掲書 9, p.281)
- 66) 中野誠一, スキー部報 (文武会々報 第 92 号, 1922, p.66)
- 67) 北大スキー部, 北大スキー部飛躍台建設報告 (山とスキー, 第 34 号, 1924, p.11)
- 68) 松川五郎, スキー部報告 (文武会々報 第 94 号, 1923, p.78)
- 69) 中浦皓至, 発祥の地・三角山シャンツェの歩み (大倉山物語, 札幌市教育委員会, 2001, pp.70-81)
- 70) 北大スキー部三十年史 (前掲書 52, p.25)
- 71) 村本金彌, ジルバーシャンツェを飛んだ頃 (前掲書 48, p.85)
- 72) 加納一郎, 北海道山岳会所属シャンツェ設計報告 (山とスキー, 第 35 号, 1924, pp.15-19)
- 73) 北大スキー部, 札幌中等学校スキー競技会スキージャンピング (同上書, pp.20-23)
- 74) 廣田生, 完成近きサッポロシャンツェ (山とスキー, 第 68 号, 1927, pp.35-37)
- 75) 小樽新聞, 東洋一の大シャンツェ, 大正 15 年 11 月 20 日
- 76) 北海タイムス, 晴れの選手を迎えて札幌シャンツェの輝き, 昭和 3 年 1 月 23 日
- 77) 中野誠一, スキーシーズンを顧みて (山とスキー, 第 14 号, 1922, pp.19-20)
- 78) 小樽新聞, 陸海軍人も参加する今日の全国スキー大会, 大正 11 年 2 月 19 日
- 79) 小樽新聞, 出場選手意気込むスキー大会はけふ, 大正 11 年 2 月 19 日
- 80) 北海タイムス, 小樽全国スキー大会午後の壮観, 大正 11 年 2 月 21 日

- 81) 年報, 前掲書 9, p.382
- 82) 小川勝次, 日本スキー発達史, 朋文社, 1956, p.50
- 83) 北越新報, 高田スキー大会, 大正 12 年 1 月 22 日/全日本スキー選手権大会信越予選 (山とスキー 第 26 号, 1923, pp.18-19)
- 84) 本田治吉, スキー部報告 (文武会々報 第 95 号, 1924, p.78)
- 85) 本田治吉, 北大スキー部ジャムピング競技規定 (山とスキー 第 32 号, 1924, pp.34-44)
- 86) 本田, 前掲書 84, p.80
- 87) 大野, 前掲書 53, p.29
- 88) 北大スキー部三十年史 (前掲書 52, p.28)
- 89) 小川, 前掲書 82, p.84

〈写真及び図の出典〉

- 写真 1 大矢敏範のジャンプ (大野精七, 北海道のスキーと共に)
- 写真 2 ジャンプの発祥地 (水口忠氏撮影, 現在の小樽市真栄町)
- 写真 3 学生時代の木原均 (木原ゆり子氏所蔵)
- 写真 4 ジャンプ合宿の小沢妻神スロープ (筆者撮影)
- 写真 5 日本初のシルバーシャンツェ (北大スキー部十五周年記念誌)
- 図 1 Fridtjof Nansen, jumping, *The first crossing of Greenland*, 1901, p.103
- 図 2 Anton Obholzer, 5000 Jahre SKI, 1975, p.105
- 図 3 H. Hoek, Der Sprung, *Der Schi*, 1911, pp.138-139
- 図 4 鶴見宜信, スキー術, 厚生堂, 1912, p.54
- 図 5 金井勝三郎, スキー滑走, 田中鉄工場スキー部, 1913, p.66
- 図 6 廣田戸七郎, スキージャンピング, 山とスキーの会, 1923, p.1
- 図 7 山口十八, スキー (スキー, 第 1 号, 越信スキー倶楽部, 1912, p.14)
- 図 8 「スキ」 馳け (少國民, 第 8 年 8 号, 學齡館, 1896, pp.62)
- 図 9 北海タイムス, 北海道予選スキーコース図, 昭和 4 年 1 月 18 日
- 図 10 山とスキー, 第 34 号, 1924, p.13
- 図 11 山とスキー, 第 35 号, 1924, p.17
- 図 12 山とスキー, 第 68 号, 1927, p.36
- 図 13 スタック, 第 2 号, 札幌第二中学校, 1930, p.17